

---

# もしもムギちゃんが.....

村上 龍之介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もしもムギちゃんが……

### 【Nコード】

N8157N

### 【作者名】

村上 龍之介

### 【あらすじ】

けいおん！の二次創作SSを書いていくのかもしれないw

名門力士の家柄に生まれていたら？（前書き）

初ギヤグ小説です。トータルでも2作目。

しかも思いついて二日で書き上げてしまったので……  
酷いところもありますが、見ていってくださいw

## 名門力士の家柄に生まれていたら？

ズーン……ズーン……

端正な住宅街に轟音が響き渡る……

現時刻は午前5時30分、こんな朝早くから轟音を鳴らすのは一人しかない。

「どっせーい！」

小さい女の子から発せられているとは思えないような声が聞こえてくる。

「うおおおおおおおつ！」

「うるさあぁいー！」

あまりにもうるさいのでついに注意してしまった。やばい。

「唯ちゃんは私の稽古を邪魔するのかしらアアアツ？」

「い……いえ、まだ早いので私は寝てます……」

「あら？一緒にやりましょうよ」

このうるさく、むさい女の子は琴吹紬ちゃん。私たちの間では親しみを込めてムギちゃん、と呼ばれている。

「せい！せい！せい！せええええい！」

家が揺れている、どうやらツツパリの練習をしているようだ。

私たちは私立桜が丘高校に通う、高校生だ。

私とムギちゃんは桜が丘高校の軽音部のメンバーで、あと3人いる。今日は軽音部の合宿でムギちゃんの家泊まりにきたのだが、ムギちゃんの家は伝統ある相撲の名家らしく、その一人娘であるムギちゃんも朝早くから相撲の練習をしているわけだ。正直言って、うるさい。

「ふー……朝の稽古終了ね いい汗かいたわ ちょっとお風呂入ってくるわね」

「お……お疲れ様〜」

やっと終わったようだ、私はこの轟音の中でも起きなかつた律ちゃんたちを尊敬する。

私はお風呂場へ急ぐムギちゃんを尻目に、2階にある寝室へ戻っていった。

「あゝ、終わりましたか？唯先輩？」

この子は梓ちゃん、私たちの後輩だ。私よりも先に起きていたのだが、勇気がなく、布団の中で怯えていたようだ。

「終わったよゝ、あずにゃん」

「ふう……こんな早くに起きる予定じゃなかつたのに……唯先輩、私はもう一度寝ますけど先輩はどうします？」

あの凄まじい轟音で起こされたのだ、あずにゃんが眠くなるのもしよがない。

「私はもう眠気とんじやつたよゝ、このまま起きてる。」

「そうですか……ふああああ……おやすみなさい……」

さて、私はギー太の手入れでもすることにしよう。下の階から低く、それでいて揺れを伴う轟音が聞こえる、どうやらムギちゃんが四股を踏んでいるようだ。

「こんな朝から……よくやるよね……」

私はもう一度時間を確認してみた、時刻はもうすぐ午前5時45分になるうとしている。

「ふうふう！いい湯だったわ〜」

「あ、ムギちゃんおかえり〜」

「あら？まだみんな寝てるの？」

このむさい女は自分が非常識な時間に起きたことを分かってない様子だ、迷惑すぎる。

「そ……そうみたいだね〜……」

適当に相槌を打っておく。

「みんな、たるんでるわ……この際、起こしちゃいましょう」

「と……時計見てよゝ普通はまだみんな寝てる時間だよゝ？」

「そうなのかしら？私の家はこれが普通だから勘違いしてたわもつと常識を知ってもらいたいものだ……これがお嬢様というやつか。」

「そ……そういえばムギちゃん、お風呂で四股踏んでたよね？お風呂でも稽古するの？」

「そうよ？人生常に精進あるのみ、よ」

「ということは毎日やってるのか……近所迷惑も甚だしい。」

「ん〜、唯〜何話してるんだ〜？」

「おはよう……みんな……」

そんなことを話しているうちに律ちゃんと澪ちゃんが起きてしまった。

「　　そうかあ、そんなことがあったのか……」

「　　そうなんだよ、律ちゃん。」

なんで律ちゃんはその状況で起きなかったんだろう……。合宿は後二日ある、眠くて死にそうになる前にその秘訣を教えてくださいたいものだ。

「　　やっぱり稽古とかしてるんだな〜、あの足の筋肉凄いなあとは思ってたけど……」

「　　その辺の陸上選手なんかを軽く凌駕してる足だよな〜あれは……」正直なところ、なぜムギちゃんは軽音部に来たのだろう？と思っっている。表向きはピアノをやっていたから、らしいが……相撲部に入ればよかったのに。

今更嘆いても遅い、実際ムギちゃんはキーボードは相当な腕前なのだから。

しかし、キーボードが壊れそうなくらい強く弾くのはやめて欲しい、本人は力こそが正義よとかいっているが、キーボードが可哀想すぎる。

「唯ちゃん、律ちゃん、何話しているの？」

横からあの筋肉女が話しかけてきた。横に来るな、筋肉が移る。

「ムギちゃんの足すごいな〜って」

「あら？そうかしら？まだお父様やお母様には敵わないわ 唯ちゃんも10年くらい修行したらこうなるわよ」

誰が10年もするか、この脳筋女が。

「え……遠慮しておくよ〜。」

「あら、残念。」

ムギちゃんの瞳が一瞬睨みつけてきた気がしたが、すぐに気のせいだと思った。

朝ごはんを食べ終わった頃、あの脳筋女がまた話しかけてきた。

「食後のランニングへ行きましょう」

ランニングか……それくらいなら合宿らしくていいな。と思い、承諾した。

しかし、内容は軽音部の合宿とは程遠い、地獄のようなものだった。よく話を聞かされずに承諾した私たちは、すぐに後悔することになった。

「ムギ……はあ……ちゃん……これっ……はあ……何キロ……走るの……？」

「そうねえ……あと10キロくらいかしら？」

既に5キロほど走っていたのだが、返ってきた答えがこれだ。これでは軽音部じゃなくて駅伝部ではないか。全く、どこまでも脳筋女だな、こいつは。

やっと終わった……何回か三途の川を見た気がする……

「ふう……やっと終わったわね〜、みんな遅いわよ？」

当たり前だ。合計15キロを軽く走れる女の子はそうはいないぞ、お前がおかしいだけだ、この脳筋女。

すっかり疲れてしまった、今日はもう動く気がしない……

「ねえ……これ、毎日……やってるの？」

「当たり前じゃない」

「学校の日も？」

「？愚問よ、唯ちゃん。」

こんな質問をした私がバカだったようだ……そんなことを思いながら私は気絶した。

頭が痛い……吐きそうだ……トイレはどこだ……

目を開けると、私の頭を鷲掴みにしながら私の名前を大音量で叫んでいる脳筋女の姿があった。こいつのせいか……

「ム……ムギちゃん……私大丈夫だよ。」

「唯ちゃああああん！」

うるさい、鼓膜が破れるかと思った。なんで最後の最後で一番でかい声で叫ぶんだこいつは。

「唯ちゃん……本当に良かった……」

こっちは良くない、正直言ってさっきのが一番ダメージが大きかった気がする。

本気で一瞬お花畑と川の向こうで手を振っているおじいちゃんが見えたからな……

「……他のみんなは？」

時計を見る。今は午後6時、結構気絶していたようだ……

「みんなは焼肉をするために外に出てるわよ」

律ちゃんたちも15キロを一緒に走りきったはずだ。……あいつらも脳筋女の仲間か。

その時、お腹が鳴り始めた。ちょっと恥ずかしい。

「あらあら？お腹が減っているのかしら？唯ちゃんも外へいってらっしゃい」

「ム……ムギちゃんは？」

「私は食前の稽古が終わってないから」

……呆れた。こいついつたいたいどこまで筋肉でできてるんだ……

「そ……そうなんだあ〜。」

「じゃあ、また後でね」

ムギちゃんは走ってどこかへいつてしまった。まだ走る元気があるのか……こっちは這い蹲るので精一杯だというのに……

私はナメクジのように這いながら、やっとのことで外へ出ることに成功した。

「ごっちゃんです!」

なにか物凄く、普通の家なら不自然だがここなら逆に自然な声が聞こえる……

「あつ!唯!大丈夫だったかあ?」

「う……うん……それよりも、この人たちは?」

私は律ちゃんの下半身の筋肉を眺めながら尋ねた。

「ごっちゃんです!」

「ムギのお父さんの知り合いの相撲部屋の人だってよあ〜」

……なんだろう、この状況をおかしいと思わなくなってきた自分に嫌気がさしてきた。

「こ……こんにちは。」

「ごっちゃんです!」

……また頭が痛くなってきた。それしか喋れないのかこいつは……

「しかし、運が良かったなあ〜唯は!」

「え?」

「この人、あの有名な寿の山なんだぜ?サインもらえよ!」

「ごっちゃんです!」

いいからお前は黙ってる。

「へ……へえ、そうだなあサインもらおうかな!」

「ありがとうございます!」

「普通にしゃべれるのかよっ!」  
律ちゃんがかさずツッコミを入れる。それは私のセリフだ。

その時、あの低く、揺れを伴った轟音が近づいてくるのに気づいた。

「おーい、ムギ〜早くこいよあ〜!」  
「ちよつと待ってください」

四股を踏みながら近づいてくるムギちゃんを見ながら、私は自分が所属しているのは軽音部なのだと言い聞かせていた。

「ん?どうしたんだ?唯?」

「……いやなんでもないよ、律ちゃん。」

「?そっか」

「ふーっ……ご飯にしましょう」  
違和感なく混じってくるこいつの存在が怖くなる。

「ごっちゃんです!」

……もうそれはいいから。

「ふう、食った食った!」

「律ちゃん食いすぎだよ〜太るよ?」

「唯〜お前言うようになったなあ〜……」

私が言っているのは決して冗談などではない。1時間前、この場には200Kgは確実にあるであろう、肉の塊が確かに2、3個ほどあったのだ、ちなみに肉はもうちよつとで無くなるうとしていた。それもこれもあのごっちゃん野郎と脳筋女、そして律ちゃんのせいなのだ……

「いや〜、冗談じゃなくて……」

「ん?へんな唯だな〜」

もしかして私がおかしいのか？私が小食すぎるだけなのか？

あずにゃんと漣ちゃんのほうをしてみる。ほら、あの3人が異常なだけだ……ろ？

あ……あれ？漣ちゃんとあずにゃん……だよな？

「どうしたんだ？唯？」

「ほんとにどうしました？唯先輩？」

そこでは、1時間前までは可憐な美少女、だった脂肪の塊が、2つ並んで肉を取り合っていた

……はっ！一瞬気を失いかけていた……

横には、あずにゃんだったと思われる脂肪の塊が1つ、いた。

「ゆいせんぱい、今日は本当におかしいですよ？マラソンの後でも気絶してましたし」

……どうやら、この非常識な脂肪の塊もあのランニングがマラソンと呼ばれてもおかしくないことに気づいていたらしい。

「そ……そうだね、今日はお休みすることにするよ」

「それがいいです！ゆっくり寝て、明日のために力を蓄えて下さい」

「私から律先輩や、漣先輩に言っておきますから！」

「ありがとう、し……おっと、あずにゃん！」

危ない。見た目があまりにもあれだったもので本音を出してしまうところだった。

筋肉痛で悲鳴をあげている体を引きずりながら私は寝室へと戻っていった

今何時だろうか。あれから結構時間がたった気がするけど……

ズーン……ズーン……

時計を見ると、午後8時だった。

ズーン……ズーン……

今朝と同じような轟音が鳴り響いている……

「またあの脳筋女か？」

おっと、声にだしてしまった……誰もいないし、大丈夫だろう。

私はこの家の地下にあるという、土俵へ行ってみることにした。

ズーン……ズーン……

近くに行くにつれて音が大きくなってくる。

「……っせい！せい！せええええい！」

今朝と同じ掛け声だ。脳筋女か……いや、おかしい、音は複数鳴っ

ている……脳筋女の親とか？

「どりゃアアアアア！」

「押し出し！寿の山の勝ち！」

「私が勝てないなんて……流石ね！」

「いえ、ムギさんこそ……女の子なのに、ここまでできるなんてッ

！自分、一瞬負けるかと思いましたがよ！」

……あの脳筋女はプロの力士と対等に戦えるらしい。もうどんなこ

とが起こっても驚かないぞ……

さて、土俵のある部屋の前へついた。些か勇気がないが、あの寿の

山が苦戦しているところを見てみたい。あの力士は横綱間違いなし

と言われているからな……

思い切ってドアを開けた

「……！？」

そこでは驚くべき光景があった。

「な……なにしてるの？律ちゃん？」

道場の隅で先程の取り組みを回想しながらだべっている、脳筋女と

寿の山の横で、その驚愕の事態は起こっていた。

「え？ドラマの練習だけど？ってか唯、やっと起きたか！これでセ

ツシヨンできるぞ！文化祭まであまり日がなないからなあ」  
……ドラム？私は目を疑った。  
目を擦ってみたが、何回擦っても目の前の状況は変わらない。頬をつねってみても、やはり変わらなかった

律ちゃんは、床にバストラヤ、シンバルをおいてその上で四股を踏んでいた

「り……律ちゃん？スティックは？」

「スティック？あるだろ？」

律ちゃんはおもむろに足を上げだした。足の裏にスティックがガムテープでくっつけてある。

「スティックって手に持つものじゃ……？」

「唯もうちよい寝てたほうがいいんじゃないのか？手にスティックなんか持ったらどうやって四股踏むんだよ？」

「おかしいでしょ？ねえ、あずにゃ……！？」

私は、この驚愕の事態から目をそむけるように、あずにゃんの方を向いた。

あずにゃんは、ギターに対して張り手を連発していた

私はこの地獄から逃げるように、漣ちゃんを探した。

「ね……ねえ？漣ちゃんは？」

「漣？漣なら向こうの部屋に行ったぞ？」

私は律ちゃんが指さした方向にある部屋へと、全力疾走で駆けて行った。

「ねえ、みおちゃ……!?!?」  
扉を開けると、そこには

ベースを四方投げで投げている澁ちゃんがいた

「おお、唯! やつと起きたのか、本当に心配したんだぞ?」

「み……澁ちゃん、何してるの?」

「何って、ベースのチューニングだよ、昨日やってなかったからな。」

澁ちゃんはそういうと、部屋の出口に行つて、律ちゃんたちが居る方を向き、

「おい! 唯も起きたんだし、そろそろやろうよ!」  
と叫んだ。逃げようか。

私は、逃げようと思い、さっきの部屋へ戻ったが、すぐにその考えを捨てた。

「あら? どこへ行くのかしら? 私も楽器とってきたばかりなのに?」

……この脳筋女がいたからだ。

「わ……私もギター取つてこないと……」

「その必要はないわよ? もうこっちにあるもの。」

そういつて脳筋女が指さした所を見ると……ギターが置いてあった。逃げることは出来ないらしい。

「おい、こっちは準備できたぞ!」

私はいつも通り、ギター太のネックを首に掛け、ギター太を手を持った。

「唯、そんな持ち方してどうやって弾くつもりだよ……?」

「あ……あはは、ちよつとしたギャグだよ!」

取り繕うことはできたが、心の中では酷く動揺していた。

どうやって弾けば良いんだろう……

そういえば、漣ちゃんやあずにゃんは手にピックを持ってなかった。どこにあるのだろう？

「あ……あずにゃん？ピックはどうするんだっけ？」

「ピック？ピックですか？ピックは手のひらにくっつけて……って唯先輩？大丈夫ですか？」

「い……いや、念のために聞いてみただけだよ。」

「そうですか？では初めましようか？律先輩！どうぞ！」  
律ちゃんが四股を踏み始めた。

私たちは今、あの夢の武道館へ来ている。念願の武道館ライブがついに開催されるのだ。私たちはこの日まで10年間必死に活動が続けてきた、その成果がやっと……やっと実るのだ。

「放課後ティータイムさん！そろそろ出番ですよ！」

スタッフさんが呼びに来る。さて、いかなくちや！

「唯、漣、梓、ムギ。良くここまで着いてきてくれた。本当にありがとう。」

「律ちゃん！そんなのらしくないよ！」

「そうですよ律先輩！」

「さて、そろそろ行こうか！」

私たちは、夢の舞台へと進み出した。いや、もうすでに夢などではない、これは現実なのだ。

「こちらです！」

スタッフに誘導されて、舞台袖まできた。柄にもなく緊張している。「私たちの実力を出し切れれば大丈夫ですよ！頑張りましようね！」既に満員の観客席からは、雷鳴にも勝る激しいラブコールが聞こえている。

「どっぞー！」

スタッフの合図で私たちはステージへ飛び出す。ちなみに、楽器のセッティングは既に済ませてある。

「どうも〜！放課後ティータイムです〜！」

ヒートアップしていた観客席から、更に熱い熱気が漂ってきた。

「じゃあ、1曲目、聞いてください！S i k o h u m e ! G I R L  
S !」

律ちゃんが目配せしたあと、四股を踏み始める。

夢の舞台は、まだ始まったばかりだ。

<終了>

名門力士の家柄に生まれていたら？（後書き）

本作品は、二次創作です（念のため）

唯ちゃんのイメージが崩壊してしまった方はごめんなさいw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8157n/>

---

もしもムギちゃんが.....

2011年10月7日23時43分発行